

# 近世初期琉球久米村士人の文化的様相について

——蔡堅の生涯を手がかりに——

劉 書 鈺

Some Cultural Aspects of Kumemura's Scholars  
in the Early modern Ryukyū:

Through Cai Jian's career

LIU Shuyu

This article reviews the cultural aspects and Confucian education of Kumemura in early modern Ryukyū through the Cai Jian's career. In historical materials such as “琉球使臣贈答録” from the Korean, “冊封使録”, and “琉球官話集” in the late Ming or the early Qing Periods, the family of Kumemura was recorded and described their costume.

As a result, Kumemura's scholars did not usually wear “Wang Jin” in the 16th century. That means the Confucian coming-age-ceremony was no longer held in Kumemura. According to “冊封使録”, the level of Confucian Education in Ryukyū was deficient. The reason lies in the decay of Chinese Imperial College's Education and the lack of Ryukyuan monks' ability to interpret scriptures in the Mid-late 16th century. From my perspective, “四書大全” used by the Ryukyuan students of Chinese Imperial College, and “四書集注” transcribed by Ryukyuan monks from Japanese in the early 17th century were the textbooks used by Kumemura's scholars.

Keywords: Wang Jin, *Liuqiushicheng zengdalu*, Canonization Records, Chinese Imperial College of Nanjing, Mandarin Chinese text in Ryukyu

キーワード：網巾、琉球使臣贈答録、冊封使録、南京国子監、琉球官話集

## はじめに

かつて沖縄には久米村（クニンダ）と呼ばれる福建系中国人（閩人三十六姓）の居留地が存在した。明代に公式に派遣された中国人や密貿易に従事した中国人は、それぞれの理由をもって琉球諸島に渡来、定着し、次第に唐営（のちに唐榮、久米村とも）を形成していった。彼らは、数代にわたって琉球と中

国との朝貢事業に携わった。また、古琉球という時期から近世期<sup>1)</sup>に移行する時、久米村人の文化的様相も琉球王国の政治・経済の変化とともに変貌した。

18世紀以降の久米村人の具体像が豊富に残る史料によって徐々に解明されているのに対して、17世紀初期の久米村人の風俗・教育は果たしていかなる様相を呈していたのか、なお明確ではない。彼らの風俗に関して琉球の正史『球陽』（1743～1745）第321条には、

唐栄士臣衣冠容貌悉従国俗。明洪武壬申 勅賜閩人三十六姓以敷文教於中山、兼令掌貢典。 国王察度深喜悦之、即卜宅于久米村而栖居焉。遂名其地曰唐荣（素称唐营。今改荣字）故其所服衣冠、皆従明朝制法包網巾、戴方巾紗帽。至于順治庚寅始以剃髮結欹髻改用球陽衣冠、悉従国俗以示心服清朝之意矣<sup>2)</sup>。

とある。つまり、順治庚寅（1650）以前の久米村人が身にまとっていた衣冠は、すべて明朝の製法に従って作られていた。彼らは、「網巾」を巻き方巾と紗帽をかぶっていたが、1650年以降、はじめて真ん中の髪を剃って琉球式の髻にするとともに服装を琉球衣冠に改め、清朝に服属する意を示したという。この琉球の「網巾」について原田禹雄は『冊封使録からみた琉球』の中で、「久米村の人々は、日常的にも、網巾をつけていたのではあるまいか<sup>3)</sup>」と推測している。一見近世初期の久米村人は、ずっと明人の風俗を維持していたように見えるのだが、『球陽』のほか琉球冊封使録と朝琉交流史料を読み直すと、そうとは言いきれないようである。

16世紀後期から17世紀初頭における久米村人の服装あるいは慣習は、管見の限りあまり注目されていない。しかし、この時期の朝鮮と琉球使臣の対話からその文化上の微妙な変化が垣間見られる。朝鮮と琉球の交流は早くから研究者によって注目され、多くの研究があるが<sup>4)</sup>、そのうち李晔光と蔡堅との交流事跡に言及した研究としては、河宇鳳『朝鮮と琉球：歴史の深淵を探る』（2011）<sup>5)</sup>と楊雨蕾「朝貢体制的另一面：朝鮮与琉球使臣在北京的交往」（2014）<sup>6)</sup>の研究が挙げられる。河宇鳳は、15、16世紀の朝琉使臣の往来資料や漂流民の報告及び朝鮮の琉球古地図などを通じて琉球と朝鮮との文物交流や相互認識を詳

1) 琉球史の時代区分については、従来、10世紀から1609年の薩摩侵攻までの時期を古琉球、1609年から1879年の廃藩置県までの時期を近世琉球と呼んでいる。近年、豊見山和行は、国家政治史による新しい時代区分を提唱している。すなわち、1420年から1609年までの時期を琉球国前期、1609年から1879年までを琉球国後期と区分している（豊見山和行「琉球史における時代区分論」（『琉大史学』（第20号）1-12）、2018年）。本稿は便宜上、近世琉球という用語を用いる。

2) [鄭秉哲ほか原編]、球陽研究会編『球陽』（『沖縄文化史料集成5』角川書店、1974年）、220頁参照。

3) 原田禹雄『冊封使録からみた琉球』（榕樹書林、2000年）、134頁。

4) 河宇鳳「15・16世紀の琉球と朝鮮の交流—偽使問題を中心として」（『東アジアと日本東アジアと日本（2）』九州大学大学院比較社会文化研究院、2005年）、松浦章「嘉靖13年朝鮮使節が北京で邂逅した琉球使節」（『南島史学』第72号、2008年）、高瀬恭子「琉球と朝鮮」（『アジアの海の古琉球—東南アジア・朝鮮・中国』榕樹書林、2009年）などがある。

5) 河宇鳳 [ほか] 著、金東善 [ほか] 訳『朝鮮と琉球：歴史の深淵を探る』（榕樹書林、2011年）。

6) 楊雨蕾「朝貢体制的另一面：朝鮮与琉球使臣在北京的交往」（『学術月刊（12）』2014年）。

しく論述しているが、李暉光と蔡堅との交流を紹介するにとどまっており、対話内容についての具体的な分析は見えない。楊雨菴は、万暦年間における李暉光と蔡堅の北京での交流を論じているが、彼らの対話内容にはあまり深く触れていない。

ところで、近世初期の久米村の教育状況については楊仲揆の「古琉球学制與孔孟思想」（1991）<sup>7)</sup>があるが、史料に欠落があるため、詳述はされていない。そして菊地藤吉の「儒教と琉球に於ける教育文化影響」（1991）<sup>8)</sup>は、蔡堅の琉球儒教における位置に言及しているものの、近世初期における久米村の教育様相は解明していない。

そこで本稿はこれらの先行研究を踏まえて、朝鮮側の『琉球使臣贈答録』や久米村家譜資料、さらに明末清初の「琉球官話集」などの史料をもとに、蔡堅（1585～1647年）という人物の生涯を通して、また「網巾」を扱うことによって近世初期における琉球久米村の文化的様相を検討する。そして蕭崇業と夏子陽二人の『冊封使録』を通じて近世初期久米村の儒学受容と「四書」に関するテキストのバージョンの問題を再考察したい。

## 一、近世初期の久米村文化

### 1、蔡堅の生涯について

久米村『蔡氏家譜』によると、蔡堅は、童名は真牛、号は念亭、閩人三十六姓の蔡氏の第九代子孫であり、その始祖蔡崇は福建泉州府南安縣出身で、洪武年間に琉球に渡来した人物である。

蔡堅は万暦13年（1585）に生まれ、万暦25年（1597）12歳の時に秀才<sup>9)</sup>に挙げられた。万暦27年（1599）、通事を経て万暦32年（1604）19歳の時に、黄冠に叙されて都通事となる。万暦36年（1608）、長史司を拝受し、万暦38年（1610）、進貢長史として馬成驥とともに中国に赴く。万暦41年（1613）28歳の時に座敷<sup>10)</sup>に抜擢されると同時に浦添間切喜友名地頭職を拝領している。翌年の万暦42年（1614）に貢期回復のため、王舅吳鶴齡とともに中国へ赴き、表文を進呈する。万暦45年（1617）、正議大夫と総理唐榮司となり、久米村の最高職位に上りつめた。同年、再び貢期回復のため、王舅毛繼祖と共に中国に赴く。万暦48年（1620）に尚寧王が薨去し、天啓元年（1621）、進貢と世子尚豊請封のため、王舅毛鳳儀と共に中国に赴く。天啓7年（1627）に紫金大夫に昇進している。崇禎3年（1630）、尚豊の請封事典のため、御物奉行職に任命された。崇禎6年、謝恩使として王舅吳鶴齡とともに冊封使杜三策を護送するため、中国に渡る。崇禎11年、また進貢するため、使者毛繼善とともに中国に赴いた。順治4年（1647）に没し、享年は62歳である<sup>11)</sup>。

7) 楊仲揆「古琉球学制與孔孟思想」（『第三回中琉歴史關係國際學術會議論文集』中琉文化經濟協會主編、1991年）。

8) 菊地藤吉「儒教と琉球に於ける教育文化影響」（前掲『第三回中琉歴史關係國際學術會議論文集』）。

9) 久米村の位階の一つ。14～16歳になって元服すると秀才になる。「富島壯英「明末における久米村の衰退と振興策について」（『第一屆中琉歴史關係國際學術會議論文集』1988年）、458頁。

10) 座敷は、待遇の意である。政務をとる部屋を座敷といったので、座敷に出入を許すという意を表わす。宮里朝光（監修）『琉球歴史便覧』（月刊沖繩社、1987年）、15頁。

11) 那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料篇第1巻6 家譜資料二 蔡氏家譜（儀間家）』（那覇市企画部市史編集

彼の生涯を表にすると、以下のようである。

年号・年齢	主な経歴
万暦13年（1585）1歳	誕生。
万暦25年（1597）12歳	秀才となる。
万暦27年（1599）14歳	通事となる。
万暦32年（1604）19歳	黄冠に叙されて都通事となる。
万暦36年（1608）23歳	長史司を務める。
万暦38年（1610）25歳	進貢のため長史として馬成驥とともに中国に赴く。中国国内で孔子廟に登り、孔子聖像を描く。その後、北京で朝鮮、安南使臣と邂逅する。帰途の途中で、朝鮮、日本平戸に漂着する。
万暦41年（1613）28歳	座敷に抜擢されると同時に浦添間切喜友名地頭職を拝領する
万暦42年（1614）29歳	貢期回復のため、王舅呉鶴齡とともに中国に赴き、表文を進呈する。
万暦45年（1617）32歳	正議大夫と総理唐榮司に昇進する。
万暦48年（1620）35歳	尚寧王が薨去。
天啓元年（1621）36歳	進貢と世子尚豊請封のため、王舅毛鳳儀と共に中国へ赴く。
天啓7年（1627）42歳	紫金大夫に昇進する。
崇禎3年（1630）45歳	尚豊の請封事典のため、御物奉行職に任命される。
崇禎6年（1633）48歳	謝恩使として王舅呉鶴齡とともに冊封使杜三策を護送するため、中国に渡る。
崇禎11年（1638）53歳	進貢のため、使者毛継善とともに中国に赴く。福建南禅寺で黄檗宗僧侶朝宗と交流する。
順治4年（1647）62歳	没す。湯屋前墓に葬られる。

## 2、蔡堅と李晔光との交流

15、16世紀の久米村の社会は、中国商人が頻繁に琉球に出入りしたため<sup>12)</sup>、中国風の様相を呈していた。しかし17世紀中頃になると、朝鮮使節が残した記録である『琉球使臣贈答録』（1633年）によれば久米村人の言語と服装は、「琉球化」されたとされる。『琉球使臣贈答録』の作者は朝鮮儒学者の李晔光で、河宇鳳によると3回ほど中国に滞在した経験を持つ人物である。万暦39年（1611）に、彼は朝鮮光海君の命令を受けて冠服の下賜を求めるために副使として北京に遣わされた<sup>13)</sup>。一方、万暦37年（1609）に、琉球は薩摩に侵攻され、琉球国王尚寧王は薩摩藩主島津家久に鹿児島へと連行された。しかし翌万暦38年（1610）は折しも朝貢の年に当たるため、琉球側は、長史蔡堅と馬成驥を朝貢使節として中国に派遣した。先に触れたように蔡堅は久米村出身で、馬成驥は首里出身の貴族である。琉球使節一行は、万暦39年（1611）8月、北京に到着し、朝鮮と安南使節に邂逅したのである。

李晔光と蔡堅一行との交流状況は、琉球側の史料には見えないが、李晔光の『琉球使臣贈答録』には

室、1980年）、258頁～261頁。

12) 朝鮮王朝の官員である申叔舟が成化7年（1471）に日本と琉球の歴史・風俗・言語・通交の実情を記した『海東諸国記』では琉球の中国人居留地に関して「中朝人來り居す者三千余り、家別一城を築き之に処る」と記述している。申叔舟（田中健夫 訳注）『海東諸国記』（岩波書店、1991年）、273頁参照。また成化15年（1479）の朝鮮漂流民である金非衣の報告に「唐人商販來、有因居者、其家皆蓋瓦、制度輝麗内施丹雘、堂中皆設交椅」、「江南人及南蛮国人皆來商販、往來不絶」とある。池谷望子、内田晶子、高瀬恭子編『朝鮮王朝実録琉球史料集成』（榕樹書林、2005年）、65頁参照。

13) 前掲『朝鮮と琉球：歴史の深淵を探る』、172頁。

以下のように詳しく記されている。

琉球国在東南海中、使臣蔡堅、馬成驥従人並十七人皆襲天朝冠服、自言庚戌九月離本国、水行五日、抵福建、由福建陸行七千里、辛亥八月達北京寢處、不於炕突、雖盛冬必沐浴、狀貌言語略與倭同、自僕等到館頗致慇懃之意、願得所製詩文以為宝玩、故欲見其酬答、略構以贈、而堅等短於属文不足與唱和耳、且聞要賀我国黄筆乃以二筆二墨盡之。堅等亦以刀扇各一為礼。蔡堅則能解漢音以訳語相問答如左<sup>14)</sup>。

これによると、蔡堅と馬成驥一行17人は、中国の冠服をまとめて万暦38年（1610）9月、琉球を船で出発し、5日を経て福建に到着した。また福建から出発して万暦39年（1611）8月に北京の宿に到着する。そして朝鮮人から見ると琉球使節らは中国北部の炕床に慣れず、寒い冬でも必ず風呂に入った。顔つきや言語なども日本とほぼ同じように見えた。さらに朝鮮側が、琉球使節と詩文で唱和しようとしたところ、蔡堅らは作文に優れないため、それはできず、諦めることになった。ただ互いに礼物を贈り合った。また蔡堅は中国語に通じるゆえ、通訳として朝鮮側とのコミュニケーションをとっていた。さらに朝鮮側と琉球側は、琉球の地理、王統、風俗などをめぐって様々な問答のやり取りを交わしたという。

### 3、「網巾」と礼儀

蔡堅と李暉光との対話の中で、「網巾」について言及したため、それに関する久米村の風俗の変化を考察したい。まず「網巾」に関して少し説明を加えておこう。「網巾」は、『明史』卷六十六・輿服志二に以下のように紹介されている。

先是、洪武二十四年（1391）、帝微行至神樂觀、見有結網巾者。翼日、命取網巾、頒示十三布政使司、人無貴賤、皆裹網巾、於是天子亦常服網巾。又『会典』載皇太孫冠礼有云、「掌冠跪加網巾」、而皇帝、皇太子冠服、俱闕而不載<sup>15)</sup>。

また、明代の大百科事典である『三才図会』には、以下のような図と説明が見える。

14) 林基中編『燕行録全集 10』（東國大學校出版部、2001年）、168頁参照。

15) (清)張廷玉等撰『明史』（中華書局、1985年）第六冊、1620頁参照。



古無是制 国朝初定天下、改易胡風、乃以絲結網、以束其髮、名曰網巾。識者有法東中原四方平定之語。海汲万象録曰 太祖微行至神樂觀、觀見一道士結網巾召取之遂為定制<sup>16)</sup>。

つまり、「網巾」は髪を束ねる重要な道具で、洪武24年（1391）に明太祖朱元璋によって国中に発給された。その命名から見ると、「網巾」は「天下」を統一する、あるいは「天下」の人々を従順させる意味合いを持っていたようである。ここから「網巾」は単なる髪を束ねるものではなく、重要な政治的な位置づけがあったと推察される。

さらに、「網巾」は頒布されて以来、早くも明の士人と庶民に受け入れられ、ひいては礼儀作法と結合し、冠礼という通過儀礼を執り行うに際して不可欠なものとなった。明代に大きな影響力のあった冠婚葬祭の手引書である丘濬（1421～1495年）の『文公家礼儀節』「冠礼」の章にも網巾について、「是日、早起。用卓子陳當用衣帶、靴履、梳篦、網巾並用笥盛于房中（中略）。掠頭、今無其制（中略）擬以時制網巾代之」<sup>17)</sup>と記している。

また、福建出身の官僚である李廷機（1542～1616年）家の儀礼をまとめた『李文節先生家礼』の冠礼の章には、「候吉時、服常袍、座向吉方、櫛髮、包網、加冠」<sup>18)</sup>とある。なお、明代の士大夫は出かける時に必ず「網巾」の上にまた巾と帽を加え、そうしなければ失礼と見なされたという<sup>19)</sup>。

以上からみて、明代の「網巾」は、王朝に服従するという政治的な役割を持ちのみならず、冠礼にも用いられる成年の象徴となっていたことがわかる。清朝のシンボルが辮髪だったのに対して、明朝のシンボルは「網巾」だったと言えるかもしれない。

16) (明) 王圻、王思義『三才図会』（上海古籍出版社、1988年）中冊、1502頁参照。

17) (明) 丘濬『文公家礼儀節』和刻本、万治2年（1659年）刊本（吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇 六』（関西大学東西学術研究所資料集刊、2016年）、92～93頁参照。

18) (明) 李廷機『李文節先生家礼』（編纂委員会編『四庫禁毀叢刊』北京出版社、1997）、685頁参照。

19) 高春明著『中国服飾名物考』（上海文化出版社、2001年）、267頁。

#### 4、「網巾」にまつわる問答

万曆39年（1611）、蔡堅一行は朝鮮使臣の服装に関し、以下のような問答を残している。

其使臣又問訳官曰「貴国常着紗帽・網巾乎。」

訳官答言「紗帽着於公会、平居皆着冠、至於網巾無貴賤常着。」

其使臣曰「本国則常時不着網巾與冠矣<sup>20)</sup>。」

すなわち琉球使節は朝鮮側の通訳に対し、朝鮮は常に紗帽・網巾を身につけるかと問うた。朝鮮の通訳は「紗帽は公務に使うだけで、普段は皆冠をかぶり、網巾は貴賤なく常にかぶっている」と答えた。琉球使節は「琉球ではふだんは網巾と冠はかぶらない」と返事したという。

以上のやり取りを見ると、二つの問題点が生じる。一つは、朝鮮使節に質問を投げかけた使臣は誰かという問題、もう一つは、彼はどのようにして朝鮮使節の服装に関して質問したのかという問題である。

まず、朝鮮使節に質問した琉球使臣について、琉球使節である蔡堅と馬成驥一行は17人がおり、その隊列には久米村人と首里・那覇の人が混在していたと想定される。また首里・那覇人と久米村人との服装様式の違いは、夏子陽の『使琉球録』（1606）の中で以下のように述べられている。

其人状貌、與華人不甚相遠、但深目多鬚、上髭剪與唇齊稍為異、未嘗盡去也。額任質、而髻居右。其束網而髻居中者、則洪、永間所賜閩人三十六姓之裔也。貴賤所別、閑居以簪、公謁以手巾<sup>21)</sup>。

夏子陽（1522～1610年）は万曆34年（1606）、尚寧を冊封するために琉球に渡来した冊封使である。彼から見ると、琉球人の容貌は中国人にほぼ類似するが、ただ目が深く、髭が多い。また琉球人の髻が頭の右にあるのに対して「網巾」を使って髻を頭の真ん中に束ねる者は、閩人三十六姓の末裔であるという。以上によって確認できるのは、1606年の時点で普通の琉球成人男性は網巾を使わず、久米村の成人男性だけが使っていたが、上述の『琉球使臣贈答録』に見るようにそれより5年後の万曆39年（1611）、久米村人は、次第に網巾というものを使わなくなっていたということである。こうしたことからすると、朝鮮使節に疑問を投げた琉球使節は、久米村出身の人物、あるいは蔡堅本人である可能性が高い。

さらに、琉球の「網巾」に関する記事は徐葆光（1671～1723年）の『中山伝信録』（1721）にもこう見える。

前明琉球人、皆不剃髮、惟不明網巾。万曆中、冊使謝行人傑、閩之長楽人。母舅某従行、携網巾数百事、至無可售、謝使遲冊封礼久不行、云本国既服中華冠帯、冊封日如陪臣有一不網巾者、冊事不举、琉人競市一空。福建至今相諛強市者、則云「琉球人戴網巾也」<sup>22)</sup>。

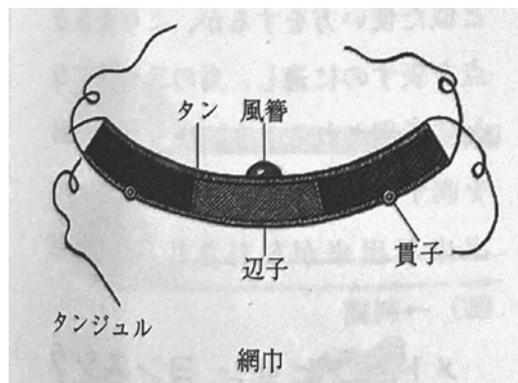
20) 前掲『燕行録全集 10』、172頁参照。

21) 夏子陽『使琉球録 卷下』、『臺灣文獻史料叢刊』第3輯55「使琉球録三種」台湾大通書局、1970）、254頁参照。

22) (清) 徐葆光『中山伝信録』（本書編委会編撰『伝世漢文琉球文獻輯稿26冊』（鷺江出版社、2012））、483頁参照。

すなわち、明代の琉球人は髪を剃らずに明朝の「網巾」も用いなかった。冊封副使である謝傑の伯父が冊封使一行に従って「網巾」を数百枚携えていったが、売れなかった。そのゆえ、謝傑はもし「網巾」を用いなければ冊封を挙行しないと琉球人を脅かした。そこで、琉球人は先を争って「網巾」を買ったという。この出来事は「網巾」を含む中華礼服の重要性を表している。豊見山和行が指摘するように、前近代社会では身分は衣服という可視的標示物によって、それをまとう人間の社会的関係・地位を表現していたのであり、その意味で衣服制は身分制の一表現形態なのであった<sup>23)</sup>。

「網巾」そのものは中国の冠服の一種であるが、朝鮮王朝では洪武25年（1392）の建国以降、明の礼法に習って早くから「網巾」を冠礼儀式に取り入れていた。その後、「網巾」は朝鮮の身分制度に合わせて朝鮮位階を示すものに変容する<sup>24)</sup>。下図は朝鮮網巾で、中国の「網巾」と比べてその形状はやや細くなっている。



網巾 (망건)<sup>25)</sup>

朝鮮王朝では貴賤なく「網巾」をつけることから、明太祖により公布された「網巾」は、朝貢国にとって明朝廷への従順を表す役割を持っていたのであろう。

こうして見ると、蔡堅一行が明の冠服をまもってはいたが、「網巾」をつけなかった理由として、17世紀前後の久米村では中国式の成人式を執り行わなかったからではないかと考えられる。しかし「網巾」は本来政治的な意味合いを持っていたため、もしそれを着用しないと明琉朝貢貿易に支障をきたすかもしれないと蔡堅らは気づき、朝鮮使臣にこのような質問をしたのであろう。

## 5、近世初期における久米村人の衣装

16世紀後期の久米村人の服装について、冊封副使謝傑（1536～1604年）の『琉球録撮要補遺』（1579）には「七姓充者、謂之「夷通事」。「土通事」能夷語、「夷通事」能華語。七姓言語、衣服與夷無別、僅以

23) 豊見山和行「琉球国王位と冊封関係について」（『第一屆中琉歴史關係國際學術會議論文集』1987年）、395頁。

24) 朝鮮の網巾は主に両側に付ける貫子の材質文様によって品級を示す。一品玉圈、二品金牽牛花様・梅花様雙螭、三品玉牽牛花・梅花等様、四品以下士庶に至るまで玳瑁・羊角を使用し、喪中にある人は牛蹄を使用するという。柳喜卿、朴京子『韓国服飾文化史』（源流社、1983年）、196頁。

25) 金英淑、中村克哉（訳）『韓国服飾文化事典』（東方出版、2008年）、153頁。

椎髻別之、髻居中者七姓、居偏者夷種也<sup>26)</sup>」とある。さらに冊封正史蕭崇業（不明～1588年）の『使琉球録』（1579年）には「然頃年讀書号秀才者、亦帶中国方素巾、足不草履而以鞋。整整乎入華風矣<sup>27)</sup>」と記されている。すなわち、閩人三十六姓の末裔は「夷通事」と呼ばれ、中国語が話せる。彼らの言語と衣服については琉球人と同じである。ただ髻の頭上における位置によって久米村人と普通の琉球人を区別する。また、書を読んで秀才と称する者は、中国の方素巾をかぶり、わらじを履かずに鞋を履いていたという。

以上の事例から、久米村人の風俗は16世紀後期になると次第に琉球の風俗へと変化していく傾向が窺われる。儒教を学んだ者は中国の服装をまとっている例もあったが、その後、明清交代などの事件の影響によって久米村人の文化的様相はいっそう琉球ふうに変貌したと言えよう。久米村人が中国の衣冠から琉球の衣冠に変わる経緯について、「蔡氏家譜」には以下のように記録されている。

明朝時、三十六姓裔孫皆不剃髮、包網巾、秀才戴方巾、官戴紗帽。衣服皆如中国製法。至清初、尚未改。順治六年（1649）己丑 世祖章皇帝遣琉球通事謝必振、齎 勅宣諭、招撫本国。尚賢王弟諱質稱、世子遣都通事梁廷幹百名親雲上、副通事周国盛島袋通事親雲上二員、隨謝必振去歸誠。（中略）本国猶執疑未遣慶賀使、又未繳明朝勅印、故于順治九年（1658）壬辰 皇帝再遣謝必振同周国盛齎 勅諭本国、船到古米山阻風不達那霸港、而先通報也。因茲本国□（大カ）驚急使唐榮人、皆剃頂髮結欵髻、衣冠改從国俗<sup>28)</sup>。

すなわち、明代の三十六姓の末裔らは、すべて髪を剃らずに「網巾」を用いて髪を束ねた。彼らは秀才になると、方巾をかぶり、官、つまり通事になると、紗帽をかぶっていた。衣服は中国の製法のように作られた。このことは清代になっても変わらなかった。順治6年（1649年）に清世祖順治帝が謝必振を琉球に派遣して琉球を帰順させると、梁廷幹と周国盛は、謝必振と共に中国に赴いて帰順の意を表した。しかし琉球側は、依然として躊躇して慶賀使を派遣せず明朝の勅印も返納していなかった。そのため、順治9年（1652年）に世祖は再び謝必振を琉球に派遣した。琉球王府は、この知らせを受けて慌てて久米村人に命じて頭頂部の髪の毛を中剃りして髪型を琉球式の髻に結び、衣冠を琉球の衣冠に変更させたという。すなわち、もし清人に久米村人の明代様式の衣冠を見られると、琉球が本当に帰順しているかどうか疑われるかもしれない。久米村人は従来のまま明代様式の服装をまとった場合、清琉関係に障害が生じることを恐れ、やむを得ず琉球の衣冠に改めたということがわかる。

以上の考察は次の二点にまとめられると考える。①16世紀後期から17世紀中期における久米村士人の風俗は、琉球に同化する一途をたどった。にもかかわらず、私的に明の服装をまとっている人は存在した。②清代になると、久米村の閩人三十六姓と新入唐榮人<sup>29)</sup>は、清琉朝貢貿易に配慮して明代の冠服を

26) (明) 謝傑『琉球録撮要補遺』（前掲『臺灣文獻史料叢刊』「使琉球録三種」）、270頁参照。

27) (明) 蕭崇業『使琉球録』（前掲『臺灣文獻史料叢刊』「使琉球録三種」）、111頁参照。

28) 前掲『那覇市史資料篇第1巻6 家譜資料二（下）蔡氏家譜（儀間家）』、295頁参照。

29) 近世期、王府の久米村振興政策によって新しく久米村に入籍させた中国人、琉球人、日本人のこと。

琉球ふうに変更した。これらは今回新たに知られた事実である。

## 二、近世初期における久米村の教育

### 1、近世初期における儒教の学習状況

蔡堅は李暉光に「短於属文」と評価されたとはいえ、贈答詩が16首残されている。そのうち李暉光の詩は14首で、蔡堅と馬成驥の詩はそれぞれ1首である。また、李暉光と出会う前年の万暦38（1610）、北京に朝貢する途中で孔子廟に登った蔡堅は、初めて孔子の画像を描いて琉球にもたらし、久米村人はその後交替でこれを祀っているという<sup>30)</sup>。このことは琉球儒教史にとっても重要な事件であるため、久米村の家譜と程順則（1663～1735）の「廟学紀略」にも記されている<sup>31)</sup>。蔡堅の才能は当時の久米村で広く認められ、三司官である鄭廻にも推薦されて総理貢典唐榮司となった<sup>32)</sup>。崇禎6年（1633年）、尚豊王を冊封するため琉球にやってきた杜三策も「蔡堅は（琉球）国の望なり」<sup>33)</sup>と称賛している。それでは蔡堅は果たしてどのような教育を受けたのか、古琉球末期から近世初期までの久米村の教育制度は、どのような様子を呈していたのだろうか。次にそれを検討してみたい。

周知のように古琉球期の琉球王国に学校制度はなかった。久米村の明倫堂も後の康熙57年（1718）に設立された学校である。それ以前、久米村人は久米村にある上天妃宮を教育場として子弟を教育していた。明末清初の「官話集」<sup>34)</sup>にはそうした場面が記されている。

阮先生、今日大老爺駕到「天妃宮」、要看門生們讀書。如今都講完了、念詩聽如何<sup>35)</sup>。

（阮先生、今日、大老爺は天妃宮においでになり、門生たちの讀書風景を見に行かれます。今は、授業が終わりましたので、詩を読むのはいかがでしょうか。）

30) 「按中山自明初通中国、雖知尊聖人重文教、然而未嘗行積奠礼。至于万暦38（1610）年庚戌、故総理唐榮司紫金大夫蔡堅奉 使入貢、登 孔子廟、見車服礼器、而心向往之。於是因 聖像以婦。每当春秋二仲上丁之期、約唐榮士大夫輪流家而祀之。然未遑立廟。」那覇市企画部市史編集室『那覇市史、資料篇第1巻6、家譜資料二（上）金氏家譜具志家』（那覇市企画部市史編集室、1980年）、59頁。

31) 「琉球国僻处海外、風俗質朴、自明初通中朝膺王爵時、王子洎陪臣子弟始入太学至洪武25年（1392）復遣閩人三十六姓往鐸焉。雖東魯之教汎漸濡、而尼山之儀容未親、及万暦間紫金大夫蔡堅、始繪聖像祀於家。」「廟学紀略」前掲『那覇市史、資料篇第1巻6、家譜資料二（下）程氏家譜 名護家』、552頁。

32) 「万暦37年（1609）己酉5月14日現任法司隨 先王赴甕島上江戸、至万暦39年（1611）辛亥被殺於甕島、迴預知其死、故称蔡堅之才足可托貢典之事、遂薦於 王。王帰国即擢蔡堅為總理貢典唐榮司云。」前掲『那覇市史、資料篇第1巻6、家譜資料二（下）鄭氏湖城家』、936頁。

33) 前掲『冊封使録関係資料資料篇 第1巻3 夏子陽 使琉球録』、35頁参照。

34) 関西大学長澤文庫蔵の『中国語会話文例集』。成立年代は不明であるが、内田慶市により明末清初と推定されている。内田慶市『『中国語会話文例集』』（内田慶市『関西大学長澤文庫蔵琉球官話課本集』（関西大学東西学術研究所資料集刊35、文化交渉と言語接触研究・資料叢刊5、関西大学出版部、2015年）、6頁。

35) 前掲『関西大学長澤文庫蔵琉球官話課本集』、238頁参照。

さらに、その教育の内容と形式について、蕭崇業の『使琉球録』では以下のように述べている。

陪臣子弟與凡民之俊秀、則請致仕大夫教之。俾誦讀孔氏書、以儲他日長史、通事之用。遇十六、七歲該貢之年、仍過閩河口地方、從師習齊人語。餘顛蒙不慧者、第宗倭僧學書番字而已。至於作詩、譬落落辰星、僅知弄文墨、曉聲律爾矣。而許以「效唐体」、吾誠不知其可也<sup>36)</sup>。

また、謝傑の『琉球録撮要補遺』には「書籍有「四書」、無「五經」、以杜律虞注為經。其善吟者、絶句僅可通、律與古風以上俱閣筆矣。教書、教武芸、師皆倭人、聰警雄俊則不逮倭<sup>37)</sup>」とある。さらに、時代が下ると、1606年に來琉した夏子陽の『使琉球録』には以下のような記録がある。

僧識番字、亦識孔氏書、以其少時嘗往倭國習於倭僧、陪臣子弟十三、四歲皆從之習字讀書。如三十六姓者、復從旧時通事習華語、以儲他日長史、通事之用。作詩、惟僧能之、然亦曉音韻、弄文墨已爾、許以「效唐」、則過也。（中略）夏子陽曰、余聞琉球國王宮之右有寺曰「円覺」、制頗宏敞。其中所藏、有國初所賜「四書」、「五經」、「韻府」、「通鑑」、「唐賢三体詩」諸書、仏經如「華嚴」、「法華」、「楞嚴」之類、亦間有之。但其僧所識、誦則止一「心經」、而所以教陪臣子弟、則一「論語」也、要亦文字之闕未広耳<sup>38)</sup>。

上の二つの史料から、16世紀中後期より17世紀初期までの琉球王国教育の一面を窺うことができる。すなわち、16世紀、中国の退官した士大夫<sup>39)</sup>を琉球に招き、陪臣の子弟と民間の優れた人材に孔氏の書を教える。彼らを通事・長史に育てようとしたことである。ここで注意すべきは『使琉球録』にいう「陪臣」のことである。「陪臣」について、夏子陽『使琉球録』に「唯大夫、長史、都通事等官則為文職、以其由秀才歷仕而專司貢獻及文移、表章也。秀才、擇三十六姓中識漢字、漢音者為之。土人不與焉<sup>40)</sup>」とあるように、通事・長史は久米村人の職であり、普通の琉球人はこれに就くことはできない。ここでいう陪臣の子弟と凡民の俊秀が久米村人を指すのは明らかであると言える。

さらに、16、7歳で朝貢する時期に遇えば閩河口（福建）に渡り、中国の先生に従って官話を勉強する。他の魯鈍な者は、ただ日本の僧侶に師事して番字（仮名）を学ぶだけである。詩作については、僧侶だけが作れるが、ただ字が書け、声調がわかるだけだという。つまるところ、この時期の琉球詩作の水準はかなり低かったようである。また謝傑によれば、儒教に関する書籍は、「四書」はあるが「五經」はない。『虞注杜律』<sup>41)</sup>という詩律に関わる本を經典とする。また絶句はやや通ずるが、律詩と古風詩に

36) 前掲『臺灣文獻史料叢刊』「使琉球録三種」、116頁参照。

37) 前掲『臺灣文獻史料叢刊』「使琉球録三種」、279頁参照。

38) 前掲『臺灣文獻史料叢刊』「使琉球録三種」、261～262頁参照。

39) 致仕士大夫について程順則の『廟学紀略』には毛擎台、曾得魯、張五官、楊明州四人の名前が見え、いつ來琉したかは不明である。前掲『那覇市史、資料篇第1巻6、家譜資料二（下）程氏家譜 名護家』、552頁。

40) 前掲『臺灣文獻史料叢刊』「使琉球録三種」、256頁参照。

41) 杜甫の律詩に対する元の虞集の集注。

至っては無理であると評価されている。日本僧侶の来琉に関しては、上里賢一によると、彼らが13世紀から17世紀に相次いで琉球に渡来したことは、たんに仏教の伝播と布教という意味においてだけでなく、琉球における漢字文化の伝播と展開においても重要な事件であったとされる<sup>42)</sup>。

17世紀の初頭になると、陪臣は13・4歳で琉球の僧侶に従って文字を学ぶ。琉球の僧侶は、幼い頃に日本薩摩に赴いて薩摩の僧侶に従って仮名や儒教經典の訓読を修める。薩摩の臨済宗僧侶は、五山文化の影響を深く受けて仏法を修行するのみならず、儒学も兼ね修めていたという<sup>43)</sup>。そうであれば琉球の臨済宗僧侶が儒学經典に通じる例も珍しくなかったであろう。また久米村出身の人は長史、通事の仕事を果たすために、再び元通事に従って官話を勉強した。詩作に関して夏子陽は蕭崇業と同じように、琉球人は詩作の能力は高くないと見なしている。

また、琉球の典籍は円覚寺に収められているといい、そこには「四書」、「五経」、「韻府」、「通鑑」、「唐賢三体詩」などが含まれる。他には「華嚴」、「法華」、「楞嚴」など仏教の經典も収蔵されている。しかし琉球の僧侶は、ただ「観音心経」を暗唱することができるが、他の典籍は読めない。そして、陪臣の子弟に教えられるものは『論語』だけだという。

要するに、16世紀中後期の久米村人は、朝貢事業を果たすために、中国人に従って儒教經典を勉強し、16、17歳になると、進貢船に便乗して福州で官話を学んだことがわかる。一方、すでに琉球に同化した久米村人、あるいは中国語に慣れない者は、日本僧侶に従って番字つまり仮名文字を学ぶ。儒教のテキストについては、「四書」だけが使われ、「五経」はないという。さらに17世紀になると、久米村人は13、4歳の時、他の琉球貴族とともに琉球の僧侶に従って仮名や漢字、基礎的な儒学（『論語』など）を学びながら、元通事から官話を教わっていたのである。

## 2、明代琉球官生の教育

中国の冊封使から見ると、このような久米村の教育、あるいは琉球の教育水準はそれほど高いとはいえない。では、蔡堅はどうして杜三策によって「国の望」と称えられたのだろうか。これに関連して胡靖の『琉球記』（1633年）には、以下のような記述がある。

蔡者国之望也。昔嘗入南雍習業数年。屢過閩習閩風景、悉解閩人及中原語、百凡要務籍其主持<sup>44)</sup>。

杜三策が来琉した時、蔡堅は48歳で、職位は紫金大夫である。また、ここにいう南雍とは南京国子監をいう。蔡堅はしばしば福建に渡ったため、福建の事情と官話を詳しく知っており、琉球での重要な事務も蔡堅が取り仕切っているという。ただ、ここでは南京国子監に留学したことがあるとされるが、『明史』、『明実録』、『南雍志』など国子監に留学した外国官生の情報を記録した史料に蔡堅の名前は見出せ

42) 上里賢一「琉球における儒学の受容」(『東アジア漢字文化圏の中における琉球漢詩文の位置』平成16年度～18年度科学研究費補助金(基盤研究(C))成果報告書、2007年)。

43) 真境名安興「沖縄一千年史 教育」『真境名安興全集 第一巻』(琉球新報社、1993年)、262頁。

44) (明) 胡靖『琉球記 附中山詩集』黄潤華、薛英編『国家図書館蔵琉球資料匯編 上』(北京図書館、2000年)、272頁参照。

ない。実は蔡堅の家族の中には、国子監官生の名前が数名確認できるので、かりに蔡堅は中国に留学したことがなかったとしても、家族の影響を受けた可能性はある。では、もし彼が確かに南京国子監に留学したのであれば、いかなる教育を受けたのであろうか、次に明代における琉球官生の教育状況を一瞥してみよう。

明代の外国官生制度は清代と異なり、留学生に対して特別な教習を設けていないとされるが<sup>45)</sup>、実際には琉球官生に礼儀を指導する人物が存在した<sup>46)</sup>。また授業方法に関しては、明代の外国人官生は中国本土の監生と一緒に勉強した。明代監生の課業については『明史』選舉志に詳しい説明がある。

其教之法、毎旦祭酒、司業坐堂上、属官自監丞以下、首領則典簿、以次序立。諸生揖畢、質問經史、拱立聽命。惟朔望給假、餘日昇堂會饌、乃會講・復講・背書・輪課以為常。所習自四子本經外、兼及劉向說苑及律令・書・數・御制大誥<sup>47)</sup>。

すなわち、国子監の授業方法は基本的に会講・復講・背書・輪課から成る。ここでの会講・復講・背書については、教官の講義、講義の復習、經書の暗唱を指す。輪課は監生自身が順番に講義することである<sup>48)</sup>。朔望、すなわち一日と十五日を休日とし、他の日には祭酒・司業と国子監の役人たちは学校に詰めて生徒たちの質問を受ける。また、学業としては、「四子本經」の他に劉向『說苑』・律令・書・數・『御制大誥』などを学ぶ。「四子本經」とは四書と各自が主とする五經の一つで、律令・書・數は、河住玄によればそれぞれ『大明律』・『大明會典』、書道、『九章算術』である<sup>49)</sup>。『明史』には琉球官生の学習に関する内容は記されていないが、その学習内容は、おそらく上記と同じであったと思われる。

しかも、学校制度では元代に始まる「昇堂法」と「積分法」を採用していた。「昇堂法」とは、成績の優劣によって在学する教室を分けることである。明代の国子監ではおおむね六つの教室に分けて授業をしていた。すなわち率性・修道・誠心・正義・崇志・広業という六つの学堂である。渡昌弘の研究によると、四書に通じるが經書に通じない者は正義・崇志・広業に在学させ、一年以上で所定の基準に到達したならば修道・誠心堂に昇り、一年半以上で經書と四書に通じれば率性に昇ることができる。つまり、初級の広業堂から高級の率性堂に至るまでには最低三年の時間がかかるという<sup>50)</sup>。また「積分法」とは、毎月の試験に合格した者は一定の「点数」が与えられ、一年間の総点が八点（分）になると「出身」が与えられ、次のクラスに昇進することができる<sup>51)</sup>。つまり、外国の官生は、もし広業堂から率性堂

45) 前掲『真境名安興全集 沖繩一千年史 教育』、265頁。

46) 張守齋という監生は、当時の祭酒である湛若水の推薦で嘉靖5年（1526）に入監した蔡廷美、梁梓らの礼儀指導役を務めた。（明）蔡汝楠「明故太学生守齋張先生墓誌銘」『自知堂集二十四卷 卷十二』（四庫全書存目叢書編纂委員會編『四庫全書存目叢書 集部 第97冊』（齊魯書社、1997年）、601頁。

47) 井上進、酒井恵子（訳注）『明史選舉志 1 明代の学校・科挙・任官制度』（平凡社、2013～2019年）、35頁参照。

48) 河住玄「明代の教育制度（三）」（『人間環境大学人間環境学部 7号』2016年）、25頁。

49) 前掲「明代の教育制度（三）」、25頁。

50) 渡昌弘『明代国子監政策の研究』（汲古書院、2019年）、34頁。

51) 前掲『明代国子監政策の研究』、35頁。

に昇ろうとすれば、中国の監生と比べて三年以上の年数がかかったであろう。

しかし、「昇堂法」と「積分法」の実施は、国子監教育の劣化とともに早くも衰えていく。衰退の原因について、国子監はもともと官僚養成のために設立された学校であるため、多くの監生は朝廷から優遇され、かえって学習する欲望を失ってしまった。よって、国子監の監生たちは科挙に合格した者よりも劣り、学校も自然に衰退していったとされる<sup>52)</sup>。

琉球から派遣された官生は、仲原善忠によれば四つの時期に分けられる。それは、第一次（1392～1413）、第二次（1482～1579）、第三次（1688～1760）、第四次（1802～1868）の官生派遣である<sup>53)</sup>。第一次と第二次は明代に、第三、四次は清代に属する。第二、三次の派遣はすべて久米村人で独占された。蔡堅は、もし琉球官生であれば、第二時期に属するはずである。この時期はちょうど明国子監の衰退期にあたっていたため、蔡堅の国子監における儒学教育は、それほど優れたものではなかったと思われる。とはいえ、官話の能力はもちろん、礼儀や官僚としての素養は当然学んできたのは容易に想像できる。そのため、蔡堅の外交と礼儀に対処する能力は杜三策に強い印象を与え「国の望」と称えられたのであろう。

琉球官生の国子監における学習は、必然的に久米村ないし琉球国全体の教育にある程度の影響を及ぼす。外国の官生たちが南北国子監で最も学んだのは、おそらく「四書」そのものであろう。「五経」に至っては、ただその中から一つを選んで本経として学んだ。なお、この時期、薩摩における薩南学派も朱子学を特に重視し、朱子の『四書集注』『大学章句』などの経書に重きを置いていた<sup>54)</sup>。薩南学派の影響を受けた琉球臨済宗の僧侶は、当然「四書」の抄本を琉球にもたらしたと推測される。しかし、その重視の程度は高いとはいえず、『論語』だけが教えられる状況にあった。そのため、蕭崇業と夏子陽が来琉した時、琉球の儒教教育は低いレベルにとどまっていたのであり、それは明代久米村官生と琉球臨済宗僧侶が受けた儒教教育の水準と大いに関わっていたのであろう。

さらに、17世紀初期、久米村人が使っていた儒教教材を考察してみたい。これまで触れたように、久米村人ないし琉球貴族の基礎儒教教育は「四書」を主としていた。では、彼らは、いったいどのようなテキストを使っていたのだろうか。清代の潘相によって著された『琉球入学見聞録』は康熙27年（1688）、中国に留学してきた琉球官生が使っていた「四書」のテキストに言及している<sup>55)</sup>。その「四書」は薩南学派の流れをくむ泊如竹が1625年に刊行した和刻本の『四書集注』であった<sup>56)</sup>。

しかし、先に触れたように1579年と1606年来琉した冊封使が目にしたテキストは、時期的に見て和刻本の『四書集注』ではありえない。おそらく冊封使が見たテキストの版本は明代琉球官生が南京国子監で勉強してきた「四書」であったと想定される。『南雍志』経籍考<sup>57)</sup>には「四書大全」が見られる。「四

52) 前掲「明代の教育制度（三）」、29～30頁。

53) 仲原善忠「官生小史」（『仲原善忠全集 第一巻』沖縄タイムス社、1977～1978年）、543～547頁参照。

54) 鹿児島県編『鹿児島県史、第1巻』（鹿児島県、1939～1940年）、811頁。

55) 「四書外籙有文字訓点四字（中略）机上有大魁四書字。」前掲『伝世漢文琉球文献輯稿 28冊』、191頁～195頁参照。

56) 高津孝「琉球的出版文化與琉球漢詩集」（『新出資料による琉球処分期琉球知識人の総合的研究—そのアイデンティティに着目して』報告書）高津孝、2017年）、41頁。

57) (明) 黄佐『南雍志』卷第十七、経籍考（金沛霖主編『太学文献大成 第四冊』学苑出版、1996年）。

書大全」「性理大全」「五經大全」などは、すべて明成祖朱棣の勅令のもとで胡広、楊榮、金幼孜らが編纂した注釈書で、高い権威を持っていた。明代の琉球官生は、「四書大全」を琉球に持ち帰った可能性がある。その一方で、朱熹の『四書集注』は、15世紀に既に日本本島に伝わったため、16世紀に琉球僧侶を介して琉球に伝えられた可能性もある。

要するに、17世紀初期の琉球では中国で出版された「四書」のテキストを用いていたが、17世紀後期になって訓点が付きの和刻本『四書集注』がそれらに取って代わり、久米村士族を含めた琉球士族に広く受け入れられるようになったと考えられよう。

### おわりに

本稿では、蔡堅の交流事跡を通して近世初期久米村の文化と教育の様相を検討した。結論としては、まず、14世紀以降琉球に渡来した明代の中国人は、数世代を経た16世紀頃、その風俗文化はすでに琉球に同化し始めていた。蔡堅は、時あたかも16世紀後期に生まれた久米村華人の末裔である。彼と朝鮮使節との交流記録から、久米村人は16世紀前後、ふだん網巾をつけず、その意味では昔あった中国式の成人儀礼を行っていないことが判明した。

それにもかかわらず、夏子陽が1606年来琉した時、久米村人の中には、私的に網巾をつけている人物もおり、網巾は久米村人と普通の琉球人を区別する標識となっていた。17世紀初期、琉球文化は次第に久米村人の文化基盤となるが、官生となって儒学を学んだ者と新しく渡来した中国人は、明代の中国習俗を再び久米村にもたらし。こうした状況は17世紀中葉まで続いた。1652年になると、清朝への帰順を示すため、明代の「網巾」などの服飾は廃止されるのである。

さらに、蔡堅の儒教教育に対する重視と冊封使杜三策との交流を起点として、16世紀前後における琉球の儒教教育につき検討した。近世初期、久米村には学校が設立されず、子弟の教育は久米村にある天妃宮で行われていた。その教育方法については、蕭崇業および夏子陽二人の『使琉球録』の記述を比較すると、16世紀後期から17世紀初頭にかけて久米村で起こった微妙な変化が窺える。16世紀の頃には、中国の士大夫を琉球に招いて久米村子弟に儒教経典を教え、16、17歳になると朝貢船に便乗して福建で官話を習得させていた。一方、17世紀初頭に久米村人の教育は、普通の琉球貴族と同じように僧侶から漢字・仮名と基礎的な儒教経典を習いながら、元通事に従って官話を勉強することになった。

近世期琉球儒学の受容については、近世期以降、特に清代琉球儒学の勃興に比して、近世初期における琉球儒学の全体的水準は低いレベルにあったと言える。その主な原因は、16世紀中後期、国子監官生教育の衰退と琉球僧侶の経典に対する解読能力の不足にあったと考えられる。蔡堅は、おそらくこのような状況に鑑みて孔子の画像を琉球にもたらし久米村人の儒学教育を向上させようとする意識を持っていたのであろう。また、「四書」に関するテキストは、泊如竹が訓点付きの和刻本『四書集注』を琉球に伝える以前は明代国子監で使われた唐本『四書大全』や日本僧侶によって伝えられた抄本『四書集注』であった可能性がある。

